

2018 年中国の新年:犬の年

中国の十二支は、各年をそれぞれ特定の動物と結びつけた 12 年で一巡する周期に基づいています。その年に生まれた人は、その動物の特質を具現すると言われています。今年、中国の新年は 2 月 16 日に当たり、犬の年の始まりを表します。

犬の素晴らしい性質は、無条件の愛と忠実さです。犬の年に生まれた人々は、強い責任感を持ち、真っすぐで正直であると考えられています。

ユディシュティラの忠実な道連れ

『マハーバーラタ』からの物語に基づいて

ヒマラヤ山脈の高地で、1 人の男と 1 匹の犬が断崖絶壁の小道を進んでいました。男は年老いていて、着実ではありましたが、ゆっくりと動いていました。犬はより軽快でした。犬は男にとっては狭すぎる所を押し分けて進み、そして高すぎる岩も飛び越えました。それから、辛抱強く注意深く、犬は男を待ったものでした。

この 1 人と 1 匹は、このような高地の、住む人もいない美しい場所で何をしていたのか、あなたは不思議に思うかもしれません。とても素晴らしい物語をお聞かせしましょう。

その男の名は、ユディシュティラといいます。ほんの数カ月前、彼は偉大な王国 — 彼と弟たちのパーンダヴァ兄弟が、彼らのいとこたちの策略によってかつて失った王国 — を統治していました。クリシュナ神の計り知れない助けと恩恵によって、パーンダヴァたちはついに王国を取り返しました。彼らは長い戦争を美德と勇敢さをもって戦い、そして彼らの勝利はダルマ、すなわち、正義が不義に勝った凱旋(がいせん)となりました。

戦争の後何年もの間、ユディシュティラは 4 人の弟と、兄弟たちの妻であるドラウパディーに助けられて、賢明かつ公平に王国を治めてきました。ドラウパディー自身、正義の柱であり、断固とした勇敢さを何度も示しました。ユディシュティラは国民を愛していましたが、年を重ねるにつれて、人生の最後の数年を精神修行だけにささげたいという心の底からの真剣な切望が彼の内側で育っていました。彼は、メール山への巡礼に出ることを決意しました。それは、山頂からインドラ神の天上の領域であるスワルガローカに行けるという伝説の山です。

ドラウパディーと弟たちは、彼の切望を共有しました。彼らは全員で一緒にこの巡礼に出ることに同意しました。「この世で私たちに残された時間を過ごすのに、スワルガローカへ共に旅する以上にいいことがあるでしょうか」と、ドラウパディーは言いました。

そうして、ユディシュティラは彼の後継者として、弟の孫であるアルジュナに王位を譲る手はずを整えました。そのまさに次の日、パーンダヴァたちはすべての王権、特権、財産を放棄し、質素な巡礼者の服を着て、最後の旅に出発しました。

市街の門へ向かう途中で、興味深いことが起こりました。どこからともなく、1匹の犬が現れたのです。この犬は大きな体つきで、色は茶色、そして彼らと一緒にいくと意思を固めているように見えました。犬は彼らの後を追って門を出て、ユディシュティラの少し後ろを歩き始めました。

「来た所に帰りなさい、かわいい犬よ。この旅は厳しい旅になるのだ」と、ユディシュティラは言いました。しかし犬は、ただユディシュティラを見て何回か尾を振ると、毅然(きぜん)として前を向き、小石だらけの道を大きな足で一步一步進み続けました。犬が新しい主人を選んで、彼とその家族から離れるつもりは少しもないことは明らかでした。ユディシュティラは、そうしないように犬を納得させる方法を考え付かなかったので、黙ってそのまま犬が加わるに任せました。

パーンダヴァたちが広大な乾いた平原を歩き、木々が茂った深い森を抜ける間も、犬は彼らとずっと一緒でした。山麓の丘を越えて雪に覆われた険しい山々を登る時も、すぐそばにいました。すべてのぎざぎざの山道を登る時も、すべての青く陰った谷を抜ける時も、犬は付いてきました。焼け付く日差しや突然の雪の中を旅し、和らぐことのない日々と不気味な夜を過ごしながら、犬はひるむことはありませんでした。

旅は続き、そして続き、また続けました。家族が1人、また1人と、過酷で容赦ない自然、食料不足、睡眠不足、過労のために倒れました。誰かが亡くなるごとに、他の人には続けることがより難しくなりました。そのたびに生き残っている者を慰め、大いなる自己は死を超越すると思い出させるのは、ユディシュティラでした。そしてある日、最後まで生き残っていた弟、最も強いビーマが目覚めませんでした。それはユディシュティラにとって、我慢の限界でした。彼は自制心を失い、すすり泣きました。彼はもう、勇ましい顔を取り繕う必要はありません。慰めるべき者は、もう誰もいないのです。

主人がそのような状態にあると気づいた時、犬は彼にそっと近寄って慰めました。ユディシュティラは感謝を持って犬に腕を回し、そして犬は頭をユディシュティラの胸に付けました。ユディシュティラの温かい涙はぼろぼろとほほを伝って、犬の威厳のある額に滴り落ちました。彼らは言葉にならない悲しみに暮れました。

しばらくすると、ユディシュティラは悲しみから我に返りました。天候は刺すように寒く、もし動き続けなければ、スワルガローカに着く前に死んでしまうだろうと気づきました。ユディシュティラは犬の情愛に満ちた目を見詰めて言いました。「私たちは立ち上がって、また旅を続けなくてはならない、良き友よ」

それからの日々、行く道を導いているのは自分ではなくむしろ犬の方だ、とユディシュティラは気づき始めました。犬はいつも前を走り、ユディシュティラが遅れ始めた時はいつも、「来ないのですか。あなたにはできます、ユディシュティラ！ できます！」と、言うかのように振り返るのでした。

そうして、偉大な男と彼の愛する新しい友である犬は、メール山の山頂へ向かう曲がりくねった急峻(きゅうしゅん)な道にたどり着きました。彼らは今、雲海より上の、雪がダイヤモンドのように光る穏やかな日の光の中にいました。ついに彼らは山頂に到達しました。言うまでもなく、

ユディシュティラは大喜びです。彼は、天上の歌に合わせるかのようにリズムカルに尾を振っている犬を見ました。犬はユディシュティラにほほ笑み掛けているように見えました。この美しい顔つきの犬は、あたかも彼とユディシュティラが巡礼者として等しい功德を積んだと知っているかのようでした。

ちょうどその時、ユディシュティラは何かが近づいてくるのを見たように思いました。それはぼんやりとした光の球体のように見え、はるか遠くから近づいてきました。「一体何だろう」と、彼は不思議に思い、よく見ようと目を細めました。光は彼らに向かって脈打ち続けました — そしてそれは大きくなり始め、さらに大きく、またさらに大きくなり、突然、ユディシュティラの視界はすっかり白い光であふれました。彼は片腕を自分の顔に、もう片方を犬の前に出して、その輝きを遮りました。

ユディシュティラが腕越しにじっと見ると、光の雲からある姿が現れるのを目にしました。彼は、馬、車輪、そしてついには大きな白い馬車の本体を見たのです。それは、あたかも莫大(ばくだい)な数の水晶や宝石がちりばめられているかのように輝いており、完璧なまでに美しい衣装に身を包んだ存在が操っていました。

馬車は音もなく止まりました。その存在は馬車から降りると、うっとりさせるような声で、「ユディシュティラ！」と言いました。

ユディシュティラは、自分の目と耳をほとんど信じるできませんでした。両手を合わせて、彼は声を上げました。「インドラ神！」

「私だ」と、インドラ神は優しく慈悲深いほほ笑みを浮かべて言いました。「私はスワルガローカにおまえを迎えようとやって来たのだ」

「わが神よ！」。ユディシュティラは感謝して言いました。彼の顔はよりいっそう輝きました。何と
いう偉大な出迎えを受けたのだろう、インドラ神自身がこの先の旅に同行し目的地まで案内し
てくれるとは、何と光栄なことだろう、と彼は考えました。ここまで来ることを成し遂げられなかつ
た家族たちの顔を思い出し、彼は家族全員が自分と共に馬車に乗り、一緒にスワルガローカ
に到着することを思い描きました。

「来なさい」と、インドラ神は言い、手を差し出しました。「乗りなさい」

ユディシュティラは夢想から覚めました。「かしこまりました、わが神よ」と、彼は慎み深く言いま
した。それから、はっきりと言いました。「私の犬も一緒に参ります」

「おまえの犬？」。インドラ神は驚いて言いました。そして笑ってこう言いました。「いや、おまえ
の犬は来ることはできない。長い戦争の中でダルマを守るために戦い、たくさんの功德を積ん
だのは、おまえだ」

ユディシュティラは落胆しました。穏やかな声で彼は言いました。「神よ、あなたの寛大な申し
出に感謝します。しかしこの犬を置いて、あなたに付いてスワルガローカに行くことはできませ
ん」

インドラ神は厳しい調子で言いました。「ユディシュティラ、スワルガローカの領域に入るため
には、人は死の門を通らなくてはならない。おまえは最もまれな人間の一人だ。なぜなら、あのよ
うに美德の人生を生きただけから、生きてまま私の王国へ入ることが許される。一生の功德をた
だ犬のために諦めると、そう言っているのか」

「はい、神よ、私はこの愛する友のために、スワルガローカを諦めます。彼は私を主人として選
び、この巡礼で私がしてきたのと同じ大きな苦難を耐えてきました。他に誰もいなくなった時に

は、彼は私に道連れと慰め、そして励ましを与えてくれました。この犬を愛し、称賛するようになり、私は彼を今見捨てることなどできません。実際、あなたへの道を示してくれたのは彼であると私は信じています。どちらかといえば、あなたと共に行く価値のあるのは私ではなく、彼の方です」

「では、おまえは天国へ行くという望みをかなえる以上に、犬を愛しているのか」。インドラ神は信じられないというように尋ねました。

ユディシュティラはインドラ神に恭しく頭を垂れて、毅然(きぜん)と、そして慎ましい声で言いました。「はい、神よ。この犬のおかげで、私は今も生きているのです。私が得るどんな栄光も、彼と分かち合うべきです」

そしてユディシュティラは、彼の犬の頭をなでようとしてしました。しかし、彼が手を置いた時、手は何かなじみのないものに触れました。犬の毛並みとは違う手触りだったのです。見下ろすと、驚いたことに、彼は自分の手が並外れた大きさの高貴な光り輝く槌(つち)矛の上にあるのを見ました。愛する犬のいた場所には、この大きな道具を持ったユディシュティラの父親であるダルマ神が立っていたのです。

「あなたは、父上？」と、ユディシュティラは驚嘆して言いました。

「そうだ、愛する息子よ」と、ダルマ神は言いました。その目は誇りで輝いていました。「ユディシュティラ、おまえはダルマの具現だ。人生を通して、どの段階でも、どんな状況でも、どんな出会いがあった時にも、ダルマに従った。この世での最後の旅の間、私は犬の姿で来たが、黄金の心で接してくれた。行きなさい、息子よ。インドラ・デーヴァターと共に乗りなさい！」

「ユディシュティラの忠実な道連れ」は、賢人ヴァーサによって書かれたインドの偉大な叙事詩の一つである『マハーバーラタ』の中の物語に基づいています。この教典は、紛争中の王国をめぐるパーンダヴァとカウラヴァの王子たちの間の長く続いた闘争を物語っています。この叙事詩全体を通して、ダルマの概念とそのさまざまな適用が探究されています。

改作: Margaret Simpson

挿絵: Mort Gerberg

デザインレイアウト: Jaime A. Castaneda

© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。